
工美ちゃんがゆくっ！！

orange

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

工美ちゃんがゆくつ！！

【Nコード】

N9783A

【作者名】

orange

【あらすじ】

ある日、河田祐哉コウタヒロヤのもとに謎の少女、河田工美コウタクミがやってくる。平和だったはずの河田家を工美ちゃんは……。ってなノリのコメディーです（予定）。

第一話 謎の少女（前書き）

初めてのコメディーなので、ネタ切れになるかもです……。
つまらなかったらごめんなさい……。

第一話 謎の少女

「ただいまあ」

聞きなれない声が玄関の方から聞こえた。

初めは幻聴だろうと、無視していたが、声は次第に大きくなるばかり。仕方なく、俺は重い腰を上げた。

玄関に居たのは、俺と同じ年ぐらいの（ちなみに俺は高一だ）女の子だった。

「どなた様ですか」

そんな俺の質問に答えようとせず、少女は訳の分からない事を言っただ。

「ふうん、ここが昔のあたしの家かあ。何か期待はずれ」

「だあかあらあ、あんた誰よ！」

自分の家が『期待はずれ』と言われたからか、質問が無視されたからか、俺は少々キレ気味だ。

「あ、ごめん。自己紹介がまだだったね。あたし、工美です。河田工美」

コウダ クミって、おいおい……っていつか、まさか。

「コウダってまさか『さんずい』のかわに田んぼって書くんじゃない……」

「うん、そうだけど」

何故だ？ 何故苗字が同じなんだ？

「もしかしてあんたがお兄ちゃん？」

「はあ？ 俺一人っ子なんだけど。しかもこいつと会ったの初めてだし。何言ってるんだこいつ。」

「お兄ちゃんじゃないと思うけど。一応名前は教えとく。河田祐哉だ」

「ヒロヤ？ やっぱりお兄ちゃんだ。へえ、昔からこんなにアホそ

うな顔してたんだあ」

「あの。あんたねえ、顔で人を判断しちゃいかんよ」

そう言っで見せると、工美と名乗る女の子はケタケタと笑った。

「さすがお兄ちゃん。この時から口癖変わってなかったんだあ」

だから、何故俺の事をお兄ちゃんと呼ぶ？

もう。頭の中パニックなんですけど。

「お前なあ、ワケワカンネー事ばかり言ってんじゃねーよ！」

ヤバッ。後先考えずに怒鳴っちゃったよ。彼女怯えちゃってるし。

ご近所さんが変な目で見てるし。

「あのね、あなた一体誰なのって聞きたいの。お兄ちゃんは」

精一杯作り笑いをしたけど、手遅れだったようだ。

「あ、あたし、は」

彼女が微かに震える声で言った。

「あたし、は、あなたのイモウトですっ」

ああ、なるほどね。それで苗字が同じなのね。それに、俺の事を

お兄ちゃんって呼んでたのも納得……

「って、納得する訳ないだろうが！」

ま、また叫んでしまった。なんて馬鹿な俺。

『学習能力』というものが俺には備わってないのか？

あーあ。ご近所さんの視線が痛い。どうせ『あそこの息子さん、

叫びまくってたわよ』とネタにされるのがオチだろう。

——って、こんな事が心配なんじゃない。一番心配なのは俺のイ

モウトだって言ってるコイツ。そう。頭が完全にイッちゃってるコ

イツだ。

俺が一人で留守番していた時に突然やって来た河田工美。

彼女はこれまでの平凡だった日常をこなごなに壊してくれそうだった。

第一話 謎の少女（後書き）

はちゃめちゃコメディーになる予定（汗）ですけど、少し逸れるかもしれません。

また、更新が遅れるかもしれません。

。こんな私ですが、皆さん長い目で見てやってくださいね……………。

第二話 後悔先に立たず（前書き）

第二話 後悔先に立たず

あの後俺は彼女を家に上げた。外での立ち話もなんだからという事と、ご近所さんの視線が痛いと言う事でだ。

まあ、本当のところ、後者の理由の方が大きいのだが。

この時は、まだ彼女の本性が分からなかったから、こんな事をしたのだろう。

とにかく、この間違った判断によって、俺は後で後悔する羽目になるのだった。

彼女を居間に通し、コップを二つ、テーブルに並べる。

「リクエストは？」

「ジュース」

「たたく。こいつには遠慮の『エ』の字もないのか。」

そんな事を考えながらも、俺は冷蔵庫からオレンジジュースを取り出す。そして、それをコップにトポトポと注いだ。

「それでさ、あんた一体何者なの？」

彼女の前にコップを置きながら、俺は聞く。

「だからあ、あんたの妹だって言ってるでしょ！」

さっきまでとはうってかわり、大きな態度だ。

そっちがそう来るならこっちも、と俺は立ち上がる。

「だからね、もっと詳しく説明してって言ってるの！」

「それで？」

「はあ？」

何を要求してるんだ、こいつは。

「それで？ 何か言う事ないの？」

彼女は怪しい笑みを浮かべる。

「『お願いします。工美様』と云えばいいのよ」

くそつ。こいつ何考えてるんだ。

「嫌だね」

「ふうん。じゃあ聞かなくていいのね。惜しいわね。この話を聞かないなんて」

うつつ。言いたくない。けど、聞きたい。言いたくはないけど聞きたい。

結局、勝負は、好奇心の勝利に終わった。

俺は感情を込めずに言った。

「お願いします。工美様」

「駄目よ、そんなんじゃ。もっと感情込めて。あ、どうせだったら土下座付きの方がいいわね」

カチンときた。でも、俺は、どうしても聞きたいという気持ちに勝てなかった。どうせ俺は好奇心旺盛のガキさ。

床に平伏し、言葉に抑揚をつける。

「お願いします。工美様」

その肩は、怒りで震えていただろう。

プライドがズタズタに傷つけられた。こう見えても俺はプライドが高い人間なんだぞ。

それなのに、彼女は愉快そうに笑う。

「うつふ。一度年上の人にこういう事されてみたかったのよね。あ、いい気持ち」

一瞬、台所から包丁を持ってくる事を本気で考えた。

カナリムカツク。

この時の俺には、『怒り』という感情しかなかった。

こいつを家に上げた事の後悔。

こいつに負けた悔しさ。

そういった全ての感情が、怒りへと変わる。

もしこの時、母が買い物から帰って来なかったら、俺は犯罪者と

なっていたかもしれない。

『とんでもないものを拾ってしまった』

怒りでオーバーヒートした頭で辛うじて考えられたのは、それだけだった。

第二話 後悔先に立たず（後書き）

すみませんっ。今回、コメディではなく、シリアスになってしまいました。

この小説はノリで作ってしまったので、私自身も、ストーリーがどうなるか分かりません（汗

こんな駄目なorangeですが、宜しく願います。

また、感想、評価、いつでもお待ちしております。

第三話 後悔先に立たず²（前書き）

今度こそ工美の正体を明かすつもりだったのに、駄目でした……
やっぱり、無計画で書くところなるんですね……。。

第三話 後悔先に立たず2

「あら、どうしたのその子」

帰ってきた母の第一声がこれだ。

息子と見知らぬ娘が家に二人きりなのだから（しかも息子は土下座している）聞くのは当たり前だろう。

「ああ、ちよつとね」

何か言おうとする工美を制し、俺は言った。

だって、彼女がさつきみたいに変な事を言ったら、困るのは俺だ。確実に俺だ。

母に、何言ってるのこの人？ って言われた時に言い訳するのは誰だ？

俺だ。

彼女との関係を疑われるのは誰だ？

俺だ。

と言う事で曖昧に返事を返したわけだが、

「あら、そうなの」

と母に変な目で見られた。本日二回目の変な目だ。

絶対なんかあるなこの二人っていう目だよ、これは。

あーあ。そんなんじゃないのに。だって、まだ会ってから数十分しか経ってないんだよ。そんなに何かあった方がおかしいじゃない？

……なんて俺が力説してる間に、母は台所に向かったみたいです。はい。

っていつか何か忘れてるような。あ、思い出した！

俺は立ち上がった。こうすると、彼女は座っているから、俺が彼女を見下ろす形になる。

俺は満面の笑みを浮かべて、言った。

「ねえ、工美ちゃん。聞かないと惜しい話って何かな？」

そうだよ、俺はこのためにプライドを捨てたんだよ。だから、聞かせてもらわないとね。

「あ、忘れてた。ごめんね。で、その話なんだけど……」

「待って」

俺は彼女の話に割り込んだ。彼女が首をかしげる。

「ここじゃ危ないかもしれないから、俺の部屋に行こうか」

あれ？ 何言ってるんだ、俺。

とんでもないものを家に上げたうえに自分の部屋に通そうとするなんて。ただのアホじゃないか。

「うん。分かった」

うわあ。何、この微笑み。これじゃあ、冗談だよってごまかせないじゃん……。

言葉とは、一回口にすると、取り返しのつかなくなるものだと思にしてみte感じた俺だった。

第三話 後悔先に立たず2（後書き）

わたくし、orangeは、明日からテスト勉強期間に入ります。
なので、二週間ほど更新できないかと。

皆さん応援して下さい（笑

私の成績が、良いのか悪いのか、平均なのかは、皆さんの想像にお任せしますけど。

第四話 祐哉の部屋にて（前書き）

久々の更新です。

そのせいなのか、文章がおかしいですが（汗）、読んでいただければ幸いです。

第四話 祐哉の部屋にて

「うわあ。きれいに掃除してある。なんか男の子の部屋とは思えないね」

部屋に入ると彼女はそう言った。

俺は、少し照れながら、口を開く。

「まあね。人に自分の部屋いじられたくないんだ」

彼女はふうん、と言って部屋の中を眺めている。

部屋に入って五分ほど経った。

たまりかねた俺は、

「まず座ってよ。それからじっくり君の話を聞くからさ」

と言って、勉強椅子を指差した。

「分かった」

彼女は素直に椅子に腰掛ける。彼女が座ったのを確認してから、

俺はベッドに腰を下ろした。

「まずは、自己紹介からね」

「あたしは、さっきも言った通り、河田工美。十五歳。それで、あなたの妹」

「そこを詳しく説明してくれないか。俺は一人っ子なんだ。だから妹なんて、居るわけがない。でも君は俺の妹だって言い張るし。一体どうなってるんだ？」

「ああ、やっぱりそこが気になるよね。話すと長くなるけど、それでもいい？」

俺は大きく頷いた。

「あのね……」

彼女はゆっくりと語り始めた。

「はあ？」

彼女の話が始まった直後、俺の口から出た言葉はそれだった。

理解不能な単語がたくさん出てきたために、頭が、理解することをやめてしまったらしい。

「だからね、あたしは未来から来たあんたの妹なの」

『未来から来た』

ここが分らない。

「未来から来たってどういう事？」

「だから、そのまんまでしょ。未来からタイムスリップして来たの」
彼女は小学生でもこのくらい分かるわよ、とふくれっつらだ。

これは言葉通り受け取るしかなさそうだ。超が付くほど平凡な暮らしをしてきた俺にとっては、信じがたい。けれど、これが真実なのだ。

「それじゃあ聞くけど、君は何で過去に来たの？」

俺は理解することを諦めて、彼女に問いかける。

「それは……」

彼女は少し、照れくさそうに言った。

「おじいさんに勧誘されたから」

「はあ?!」

今度こそ理解不能だ。もう訳が分らない。

「おじいさんって誰だよ」

俺が問うと、彼女は

「道で出会ったおじいさん」

と答えた。

「知ってる人か？」

「うつん。全然知らない人」

「どうやって誘われたんだ？」

「普通に、『時間旅行してみませんか?』って」

……全然普通じゃないですけど。

「未来にはそんな人がゴロゴロいるのか? 時間旅行を自由に楽しめるのか?」

俺は半ば呆れながら聞く。

「そんなことないよ。未来って言っても数年だし、そんなに進歩してないって」

「じゃあ、そのおじいさんって一体……」

俺がそう言っていると、彼女は驚いたような顔をした。

「そっだよ。どうして気づかなかったんだろう。あたしは、得体の知れないおじいさんに過去にぶっ飛ばされたんだ……」

それを聞いた俺は、啞然とした。

そんなのとづくに気がついてると思ってた。どれだけ天然ちゃんなんだ？ コイツ。

「あたしこれからどうしよう。一日で帰るつもりだったのに……」
彼女の呟きが、部屋の中で妙に響いた。

第四話 祐哉の部屋にて（後書き）

やっと、テスト終わりました。なので、もっと早く更新できると思います。もっとも、ネタが切れなければの話ですが………（苦笑）

いつでも感想、評価お待ちしてます。
書こうという気持ちがあります。

第五話 祐哉の部屋にて2（前書き）

更新が大分遅れてしまいました。

こんな作品でも楽しみにして下さっていた方、すみませんでした・
・
・
・。

第五話 祐哉の部屋にて2

『河田工美 十五歳』

中三

二年後から来た祐哉の妹』

俺はノートに書き出した。

ここでもうしても引つかかるのは、やっぱり一番最後の所だ。
「ねえ。どうしていきなり妹なんて出来ちゃったの？」

俺が問いかける。すると、ああそれはね、と彼女は言った。

「親が再婚したから」

なるほど。それなら納得がいく。

俺の親は、一年前離婚した。

お互いに性格が合わなかったらしく、喧嘩した勢いで、そのまま別れてしまったのだ。

彼女も、両親が離婚して、前までは、父親と暮らしていたらしい。それが二年後（今から二年後という意味だが）俺の母さんと、彼女の父さんが再婚したそうだ。

つまり、俺と彼女は……

「要するに、あたしとあなたは義理の兄妹って事ね」

彼女が端的にまとめてくれた。せつかく俺の出番だったのにと、悔しがる俺に呆れながら、彼女は言葉を続ける。

「って事で、あたし今からあんたの事『お兄ちゃん』って呼ぶから、お兄ちゃんはおあたしの事『工美』って読んでいいよ」

い、いきなりかよ！俺は面食らった。

いくら兄妹だからって、いきなり初対面の女の子を呼び流しにするのはかなり抵抗がある。

「工美ちゃんじゃダメ？」

「うーん。まあいいや。慣れてきたら自然に『工美』になるだろうしね」

彼女が明るく言った——ん？ 待てよ。今『慣れてきたら』って言わなかったか？ 慣れてきたらっていう事はつまり。

「おい。お前いつまで俺ん家に居るつもりだ」

「え。もちろん未来に帰る時がくるまででしょ」

こいつずっと家に居座るつもりなのか。

俺は呆れ果てた。

「母さんになんて言うんだよ」

「ああ、それなら」

彼女は俺のノートを取り上げ、なにやら書き始めた。

「いい作戦があるの」

第五話 祐哉の部屋にて2（後書き）

工美ちゃんの作戦、気になりますね。実は私も、分からないんです・
・・・・・（泣）

最近、スランプ気味です。。。どんどん更新が遅れてしまうかもし
れませんが、ご了承ください（汗）

第六話 作戦実行（前書き）

すみません。

一週間以上間が開いてしまいました。

だんだん、更新が遅れてきます。。。

第六話 作戦実行

「ね、ねえ」

台所に立っていた母に、ためらいがちに声をかける。

「何？」

振り向きもせずに、母は答えた。

「さっきの女の子の事なんだけど、家でしばらく預かる事になったから」

「ふうん、そうなの」

しばらく、沈黙が続いた。

トントン、と包丁がまな板を叩く音だけが聞こえる。

——作戦成功、と思っただけなのか？

先ほど、彼女が考えた作戦は、

『お母さんが料理に集中している時に、言っちゃえ！』
という、単純な作戦だった。

本当にこれでいいのだろうか。

本当に母に伝わっているのだろうか。

多少の不安を抱えつつも、俺は自分の部屋へと戻った。

「言ってきたよ。ちゃんと聞いてたかは分からないけど」
部屋で待機していた彼女に、結果を報告する。

「ありがとう。でもこれであたしがこの家に居てもおかしくないよね」

「多分ね」

俺は、言葉を濁した。

日本人は『曖昧』が好きなんだなあ。そして俺は日本人なんだなあ。

なんて本気で考えてしまった。

「ご飯よ降りてらっしゃい」

母の声が俺の部屋に届いたのは、七時を少し超えた時だった。

「はい」

母に聞こえるような大きな声で返事をした。

勉強机の上を片付け、パチンと電気スタンドのスイッチを切る。

よし、これでオッケー、と立ち上がり、後ろを向いた時。

彼女が俺のベッドで眠っているのが目に入った。

「おい、お前。人のベッドで勝手に寝るな」

そう言っただけで叩き起こそうと、俺は彼女に近づいた。

長めのまつげ。ぷつくらと膨らんだ唇。雪を連想させる、白い肌。

細くて、すぐに折れてしまいそうな手足。

そして、ほどよい大きさのバスト。

かわいい。

不覚にもそう思ってしまった俺が居た。

義理だとはいえ、兄妹なのだ。こんな感情を持つてはいけない。

——頭では分かっている。けれど、男である俺には制御しがたい欲求が襲ってきた。

こいつの唇を奪ってしまいたい。いや、唇じゃなくて、ほっぺでもいい。

俺は、感情にまかせ、彼女の頬に近づいた。

その時だった。

「ふああ。よく寝た。あれ？ 何でお兄ちゃんの顔がこんなに近く

にあるの？」

ドキッ。慌てて上体を起こす。心臓が飛び出しそうだ。どうしよう。どう言い訳しよう。

重い沈黙。数秒間が、永遠に感じられた。

「……ご飯だよ」

上手く誤魔化せたか自信は無い。彼女に背を向け、足早に部屋を出た。

「待つて。さっきの質問に答えてもらってないよ」

彼女に追いつかれまいと、俺は必死に階段を駆け下りた。

さっきの事は早く忘れてしまおう、と思えば思うほど、変な感情が入り込む。

未来から来た自分の妹を好きになるなんて、笑い話ではすまない。そんな事は分かっている。でも、彼女の寝顔を見たときに感じたあのドキドキは、なかなか消えてくれなかった。

ああ。一体何がしたいんだろう、俺は。

俺は、大きな溜め息を一つついた。

第六話 作戦実行（後書き）

読んで下さって有り難うございました。
私もあるべく、早く更新できるように、努めたいと思います。

第七話 作戦失敗！？

「どうしたの？ そんなに急がなくてもご飯は逃げていかないわよ」
慌ててリビングに駆け込む俺に気づいた母が言った。

俺が訳を説明しようと口を開いた時、彼女が入ってきた。

「へへ。やっと追い詰めたよっ」

なんでこのタイミングで入って来るんだよ！

そう怒鳴りつける前に、母の視線が突き刺さった。

「ねえ。この子誰なの」

とても冷たい声。

お、俺は何もやましい事はしてないぞ！

妹に口付けしようと思ったなんて、そ、そんな事無いんだからな

っ！

「さっき説明したんだけど、やっぱり母さん聞いてなかったんだね」
平静を装うが、背中には冷や汗が伝っていた。

「さっきって？ ああ、夕飯の支度してた時ね。全然聞いてなかった。もう一回説明してくれるかしら」

母さん、目が笑ってないよ。

もう泣きなくなってきた。なんで俺ばかりこんな目に遭わなきゃいけないんだよ。元はと言えば、彼女が家に来た事が原因なのに。彼女、ちやっかり逃げちゃってるし。

頑張ってるね、なんてウインクしちゃってるし。

もう、やけくそだ。ホントの事言っちゃえ！

「あの子はね、未来から来た、俺の妹なんだ」

「嘘で誤魔化そうだったって無駄よ。そんな嘘、小学生でもつけるわ
！」

あ、やっぱり無理でしたね。頭のオカタイお母様には通用しませ

んでした。

「本当なんだってば。信じてよ」

「黙らっしゃい！」

こうなってしまった母はもう誰にも止めることは出来ない。

「おなか減った」

「ぼそつと呟いてみるが、

「ふん。そんな悪い子にご飯なんてあげません」

冷たく突き放されてしまった。

うつうつ。彼女が悪いのに。悪いのは俺じゃなくて彼女なのに。

一瞬でも、彼女をかわいいなんて思ってしまった自分に腹が立つ。

『もう、どうにでもなれ！』

俺はわざと大きな音を立てて、自分の部屋へと続く階段を上っていった。

第七話 作戦失敗！？（後書き）

やっと調子を取り戻した感じです。

この調子でちよくちよく更新したいと思います。

第八話 就寝

「おい、工美。どうしてくれるんだ!」

部屋に入るなり、俺は彼女を怒鳴りつけた。
すると彼女は、ニヤリと笑った。

「お兄ちゃん、今『工美』って呼んでくれた」

「そんな事どうでもいい! お前のせいで俺は夕食抜きになったんだぞ。どう責任取ってくれるんだよ!」

「ごめんなさい」

彼女はしゅんとなつてしまった。

こついうのに弱いんだよなあ、俺。

「俺もつい、カツとなつちやって……。いきなり怒鳴ったりして、ごめんな」

一瞬にして、彼女の顔に笑顔が戻った。

——いや。これはにやけていると言った方が正しいかもしれない。

「ふふ。相変わらずこついう場面に弱いんだから。かわいいっ」

計算だつたつて訳か。そして俺はまんまとはまったのか。

「うるさいな。悪かつたね。俺はこついう性格なんだよ」

「そんなに怒んないでよ」

「怒らせたのは誰だよ!」

ああ。もう怒鳴りすぎて頭ガンガンする。

「もう寝る!」

俺は、ベッドに潜り込む。

「あ、待つて」

今度は何だよ、と睨みつけると、彼女は

「あたしはどこで寝ればいいの?」

と、言った。

「床にでも転がってろ!」

力任せに、毛布を床に投げつける。

「おやすみ！」

電気を消して、もう一度きちんと布団にくるまった。

「何それ？　それが乙女に対する態度？」

彼女の不平不満が、今や子守唄に感じられた。

とんだ一日だったぜ。明日には彼女居ないといいな。

ほんの少しの希望を胸に、俺は床に就いた。

第八話 就寝（後書き）

だんだんコメディじゃなくなってきた……。
アドバイスお願いしますっ（汗）

第九話 散々な朝

俺はぼんやりと目を開けた。

何か、背中の方に大きな衝撃を受けたような……。

それに、いつもより、天井が高い気がする。下もなんだか固くてゴツゴツしてるし。

痛い、のか？ 寝ぼけていてよく分からない。

まあいいか。まだ暗いし。明日起きてから考えよう。

——俺はまた、夢の世界に逆戻りしていった。

「ジリリリ……」

目覚まし時計が鳴っている。止めなくちゃ。

そう思い、起き上がるうとすると、身体中に激痛が走った。

「いったあああああああ！」

「んもう。朝からうるさいなあ。せつかく熟睡してたのに」

上から彼女の声が降ってきた。

ん？ 上から？

「お前どうしてベッドに寝てるんだよ」

「だってさあ。乙女が床で寝るなんてありえないじゃん。何回揺すつても起きないからさあ、床に突き落としちゃった。てへっ」

夜中に感じた衝撃は、それだったのか。

しかも、人の事突き落としておいて、『てへっ』は無いだろ『てへっ』は。

「突き落とすんじゃないよ、馬鹿あ！ おかげで、えらい目に遭った。このまんま一生動けなかったらどうしてくれるんだよ」

俺が怒っているのに対し、彼女は涼しい顔で、

「大丈夫、大丈夫。だって、二年後のお兄ちゃん、今以上に元気だ

から」

と言う。

「いや。そういう問題じゃないから」

「え？　じゃあ、どういう問題なのさ」

お願いだから、それは聞かないでくれ。朝から、子供に付き合ってる暇はねえんだよ。

そう答える代わりに、俺は言った。

「おい。お前、湿布取って来い。ついでに、朝ごはんもくすねて来い」

「はあ？　何であたしが？」

「当たり前だろ。お前のせいでこうなったんだ。その代償はきちり払ってもらうからな」

「はいはい。取ってくりゃいいんでしょ。取ってくりゃ」

彼女が小声でブツブツ文句を言う。

「お前さ。調子に乗っていると、家から追い出すからな」

そこまでされるのはさすがに嫌なのか、彼女は、へいへい、と部屋から出て行った。

ああ。また今日も散々な一日になりそうだぜ。

でも、今日が休みの日でよかった。学校がある日だったら、どうなっていた事か。

俺は、深い溜め息をついた。

やっぱり、彼女が居ないなんて事はあるえなかったなあ。

第九話 散々な朝（後書き）

大分、更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

書くうちに、コメディーでは無くなっているし、書けないしで、散々です。

アドバイスお願いします（泣）

第十話 散々な朝2

ガチャリ。部屋のドアが開く。

「おつ。上手く言ったか？」

俺は、彼女に期待を込めて聞いた。

「うん。まあ上手くいったケド……」

彼女は俯いた。

「変なのもくつついて来ちゃった」

「へ？ 変なのって？」

俺が言い終わらないうちに、もう一人の足音が聞こえた。

「祐哉！ これはどういう事なの！？」

——この金切り声は、絶対に母さんだ。

「母さん。朝から怒鳴んでくれない？ 近所迷惑だよ」

「うるさい。この際、近所迷惑なんてどうでもいいわ。まず、黙って聞いてなさい！」

はいはい、おとなしくしてますよーだ。でも、怒鳴り声が身体に響くのは、辛い……。

「まず、この女の子、家に帰さなかったでしょ」

それは違う。彼女の家はここだ。

違うよ、と呟いてみるが、完全無視。

「次に、昨日の夜、この女の子と、一緒に夜明かしたでしょ！」

母さんは、彼女を指差しながら怒鳴った。

——確かに。俺は、彼女と一緒に部屋の寝ましたよ。彼女の勝手で、そうなたただけの事だけだ。

「昨夜はさぞかし幸せだったでしょうね」

ち、違う。母さん、いくら何でも、そりゃないよ。

「それは違います。お母さん。あたしが勝手に部屋に入ってただけで、あたしはちゃんと床で寝ましたもん」

ナイスフォロー。彼女も気が利く時あるんじゃない。

床で寝てたつていうのは、半分当たりで、半分はずれだけだね。

「部外者は黙ってて。あと、あなたに『お母さん』なんて呼ばれる筋合いはないわ」

「はい。すみません」

ウソっ。あの彼女が、簡単に引き下がってるよ。母さんに楯突くと、ろくな事が無いって分かっちゃったんだろうな。きつと。

再び母さんの目は、俺に向けられた。

「で、どうなのよ。答えなさい！」

「俺は、そんな事してない。断じてしてない」

「正直に言いなさい。母さん、怒らないから」

いや。正直に言ってるんだけど。

「自分の息子の言う事が信じられないっていうのか？」

こくん、と大きく母さんの首が縦に動く。

「だって、昨日嘘ついたもん」

だから、あれも事実だって。

「母さんは何にも分かってない。俺は嘘なんてついてないんだ。全部事実なんだ」

俺が言い返すと、母さんは

「祐哉の方が分かかってないわ。あなたの為を思って言ってるのに、なんで分かってくれないのよ」

と、目に涙を溜めて、走って部屋を出て行ってしまった。

「ねえ、お兄ちゃん」

母さんが居なくなると、彼女が俺に話しかけてきた。

「何だよ」

ぶっきらぼうに言葉を返す。

「湿布、貼ってあげようか？」

彼女の手をよく見ると、そこには湿布があつた。

「朝ごはんを持ち出そうとして、台所に行ったところで捕まっちゃつて。でも、湿布は無事持ってきたから」

「……ありがとう」

昨日までの彼女が嘘みたいだ。

「冷たいけど、我慢してね」

「うん」

湿布の冷たさと、彼女の優しさが、身体中に染み渡る。

こんな妹だったら居てもいいかな、なんていう考えが、頭をかすめた。

第十話 散々な朝2（後書き）

すみません。『コメディー』じゃありませんね。

更新が遅い上に、ジャンルまで、だんだん逸れてしまいました。
これから、頑張って修正をかけて行きたいと思います。

第十一話 絶叫（前書き）

更新が遅れてしまい、すみませんでした。

第十一話 絶叫

「腹減った……」

俺は、床に突っ伏していた。

「おなか減ったよお！」

彼女は、叫んでいた。

こうなるのも、無理は無い。

なぜならば、俺たちは、昨夜の夕食を抜かれたばかりか、今日の朝食にもありつけなかったのだから。

「腹減った……」

もう一度呟いてみる。

「ねー、お兄ちゃん。なんか食べ物持ってないの？」

彼女が俺に言った。

ん？ 待てよ。確か、この辺に隠し持っていたおやつがあるはず。そう思い、机の下をゴソゴソやっていると、案の定、クッキーが一箱あった。

「あった！」

俺は思わず叫んでしまう。

「え？ どれどれ？」

彼女が寄ってくる。

「ねえ、どうしてお兄ちゃんが、こんな物持ってるの？」

「どうして持ってるのかって？ それはだなあ」

……あれ？ 何で俺、クッキーなんて持ってるんだっけ？

「えーと……。忘れた！」

「もう。お兄ちゃんの忘れんぼ。まあ、それは置いといて、早く食べよう！」

「うん」

そう言って、箱に手をかける。その時、ふと目に入っただのは、賞

味期限だった。

『2000・5・26』

確かにそう書いてある。

「……工美。今年って何年だっけ」

俺は恐る恐る聞いた。

「えつとお。2006年だよ」

彼女はカレンダーを見ながら、答える。

「このクッキー、やるよ」

「え？ 本当にいいの？！」

彼女が、目をキラキラさせながら、言った。

「ほらよ」

俺は、彼女の眩しさに目を細めながら、箱を投げる。

パシッ。

「ナイスキャッチ」

俺が言っただけで、彼女は照れくさそうに、頭を掻いた。

「いったただっきまーす！」

そう言っただけで、彼女も箱に手をかけるが、その手は一瞬にして凍りついた。

彼女の視線から見えて、恐らく賞味期限を見ているのだろう。

「2000年って、六年前じゃん……」

彼女は溜め息混じりにそう言った。

「お前なら食えるんじゃないね？」

軽はずみに、そう言ったのが間違っていた。

「はあ？ 今、何だった？」

——彼女が豹変した。

さっきまでのお前はどこに行ったんだよ！ そう突っ込みを入れてなくなるくらい。

「なんで、あたしが食えると思うの？ だって、六年前のだよ。六年前！」

彼女、何であんなにむきになってるんだろ。俺には、全然分から

ない。

「あー。なんかイライラするなあ、もうっ」

彼女がいきなり俺の上に乗った。

——しかもそれは、彼女が湿布を貼ってくれた場所な訳で。
だから当然、

「ギャー！」

痛い訳で。

「何すんだよ！」

俺が怒ると、彼女は、

「うるさいっ」

と、怒鳴り返してきた。

「ビタミン足りてませんねえ」

俺は、大きな溜め息をついた。

「家庭科で、習わなかったか？」

「……じゃあ、ビタミンちょうだい」

彼女の声量が急に落ちた。

「はあ？ それがあつたら、苦労しねーんだよ」

「それじゃあ、しょうがないね」

彼女は深呼吸をした。一体何を始めるつもりだ？ こいつは。

「いざ勝負っ！」

はあ？！ どうしてそうなるんだよ！

そう言い返そうとしたが、無理だった。

「ウギヤーツ！」

背中に走る激痛。

「お兄ちゃんのパカア！」

彼女の叫び声。

ちらりと彼女の顔を見ると、涙が頬を伝っていた。

女ってよく分からね。

俺は痛みに絶叫しながらも、そう思った。

「はあ、はあ」

彼女は数分で、もう息が上がっている。

「疲れたんだったら、そろそろ終わりにしてくれ……」

俺は、背中を擦りながら言った。

「くう。もっとおなか減ったよお」

「バカ。だからあの時、やめときゃよかったのに」

その時、ドタドタと階段を上がってくる音がした。

——母さんだ。

乱暴にドアが開く。

この時俺は直感した。

『ああ。昼食にもありつけないんだなあ』
と。

第十一話 絶叫（後書き）

前回、変な方に逸れてしまったのは、なんとか修正できたので、よかったです。

これから、きちんとコメディになるように、努力します。

第十二話 母さん！？（前書き）

今回は、コメディーを意識してます。

今までは意識してなかったのかよ！っていつつこみは無しです。
はい。

第十二話 母さん!?

「か、母さん？」

俺は、生唾をぐくりと飲み込んだ。心なしか、声が震えている。母さんは、黙って、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

……怖い。これだったら、怒鳴られた方がいくらかマシだ。

俺は思わず後ずさりをする。

「祐哉」

ひやりとした母さんの視線で、俺は動けなくなった。

「な、何でしょうか」

「買い物してきて頂戴」

「ナニイイイイ!!」

じよ、冗談じゃない。だって俺、本気で焦ったんだぜ。また怒鳴られるかって動揺してたんだぜ。それが

『買い物してきて』

だと！ 全く。それだったら、もっと普通に入って来いや！

「はい。これ持って」

母さんは、財布と、買い物リストらしきメモ紙をヒラヒラさせる。

「あたしも行きます」

彼女が突然口を挟んだ。

「駄目よ。あなたは残ってて」

即答だった。そのやり取りの速さに驚いていると、母さんが

「早く。残りのお金は自由に使っていいから」

と俺をせかした。

何も今じゃなくなっていていいじゃないか。

しかも、何で彼女は駄目なんだよ。

俺は、お金の用途の自由に興奮する反面、そんな不満も抱えてい

た。

「二人だけで、話がしたいの」

母さんの一言で、俺は部屋の外に出た。

女同士の話し合い。

俺は身震いをした。

ヤバイ事にならなければいいが。

不安は尽きないが、俺はとりあえず家を出た。

余計な心配ばかりしていては、時間の無駄だ。とにかく、早く買い物を買わせてしまおう。

買い物リストに目を走らせる。

- ・食パン
- ・バナナ
- ・きゅうり
- ・大根
- ・豚肉
- ・カレールー

——何の統一感も無い。一体母さんは、何を作るつもりなのだろうか。

ん？ よく見ると、下の方に何か書いてある。

『今夜は、この材料と残り物を使って、シチューを作ります。母』

って、おい！ どうやったらこんな物でシチューが出来るんだよ！

俺は、母さんのアホさに呆れながら、スーパーへと向かうのだった。

第十二話 母さん！？（後書き）

ちゃんと、オチは出来ていたでしょうか？

今度のは、工美ちゃん目線になる予定です。

題十三話 母さんと彼女（前書き）

今更ながら、不定期更新ですみません。

一週間に一回は更新していききたいと思います。

題十三話 母さんと彼女

お兄ちゃんが家を出て行ってしまつと、あたしはお母さんと部屋に二人きりになつてしまつた。

お互い、口を利こうともせず、ただ黙つて向かい合っているだけだ。

「話つて何？」

沈黙に耐えられなかつたあたしは、勇気を出してお母さんに言つた。

すると、お母さんは、最近の若い子は口の利き方も知らないのね、と溜め息とつきながら、こう答えた。

「せめて『話つて、何ですか？』って言わなきゃ。ね？ それは、まあいいんだけど……」

お母さんはそこで言葉を切つた。お母さんの表情を見て、あたしはピンと来た。

「あ。お兄ちゃんとあたしの関係の事だな」
つて。

案の定その後続いたのは、そのような内容の事だつた。

「祐哉とは上手くいつてるの？」

「いや。そういう関係じゃありませんから」

あたしはきつぱり言い切つた。

「じゃあなんで家に居るのよ」

お母さんの顔は相変わらず穏やかだつたが、声にはどこか冷たい響きがあつた。

「説明すると長くなりますけど。それでもいいと言つならお話しします」

あたしも負けずに冷たく言い放つ。

「話してみてもよ」

お母さんは鼻で笑つて、

「ほら。早く話してごらんさい。言い訳をじっくりと聞いてあげるわ」

あたしの話を促した。

「分かりました」

あたしは大きく息を吸い込んだ。

「まず、あの時の事からお話します」

——とうとう着いてしまったな。

俺は大きく息を吸い込んだ。

あれから俺は、出来るだけゆっくりと買い物を済ませ、出来るだけゆっくり帰って来た。

何故かって？ それは怖かったからだ。女二人の話し合いが怖かったからだ。

ごくり、と唾を飲み込む。

「いざ出陣っ！」

俺は気合を入れて家へと入っていった。

「ただいまぁ……」

控え目に声を掛ける。もちろん、と言っかなんと言っか、反応は無い。

ちよつと寂しい気もするが、静かだと言う事は、何も無い証拠なのだろう。俺は、少し安心した。

「ドタドタ、ボタン。ギャーッ」

突如、二階の方から凄い音が聞こえた。俺の耳が正しければ、恐らく俺の部屋だろう。

買い物袋を玄関に放り投げ、俺は急いで階段を駆け上がった。

「何事だ?!」

勢いよくドアを開ける。

「あ、祐哉。帰ってきたの?」

「お兄ちゃんお帰りい」

俺は、目を疑った。

……こ、これは何なんだ?

目をごしごしと擦ってみるが、目の前の異様な光景は、そのままだった。

——母さんと彼女が踊っていた。さっきの変な音は、このせいだったのだろう。

「一体俺が居ない間に何があっただんだ?」

俺が言つと、ふわりと彼女が微笑んだ。

「色々あつてさ。事情は分かってもらえたし、まあいいんじゃない?」

「そうそう。ごめんねえ。お母さんともない誤解してて」

母さんも同調する。

彼女の言う通り、分かってもらえたのはいいけど、

「この部屋何とかしてくれ!」

俺の部屋は、母さんと彼女のせいで滅茶苦茶だった——。

題十三話 母さんと彼女（後書き）

工美ちゃん目線と言っても、最初の方だけになってしまいました。
いやー。難しいですね。工美ちゃん目線。

それでは皆さん。良い年をお迎え下さい。

第十四話 母さんと彼女2

俺は頭を抱え込んだ。

本棚からは本がこぼれ落ち、勉強机に乗せてあつた筆記用具は床に、無様に転がっている。床には本、文房具のみならず、紙くずや食べかすなど、色々な物が散乱していた。それに、六年前のクッキーの箱は原型をとどめず、平たく潰れている。

「お前らなあ。どうやったらこんなにくく出来るんだよ！」

目の前には、子供みたいに小さくなつて二人。

「お兄ちゃん。ごめんなさい」

「ごめんね。お母さん、はしやぎすぎちゃったみたい」

お？ あのお二人さんにしちゃあ、すんなり謝るじゃないか。

「だから、部屋掃除だけは勘弁して」

……わざわざ目配せまでしてハモンなくて良し！

「冗談じゃない。母さんと工美が汚したんだろ？ それを何で俺が片付けなきゃならないんだよ！」

俺は腕組をして、タンタンタン、と足でリズムを刻む。

「あ。お兄ちゃんも踊りたいんだね」

彼女の目は、やっぱりねと言っていた。

「何でそうなるんだよ！ 俺は怒ってるの」

タンタンタンタン。さっきよりも強く、床を叩く。

「分かったわ。掃除すればいいんでしょ」

母さんが諦めたように言った。

「ほら、工美も手伝うのよ」

彼女の顔がみるみるうちに曇っていく。

「えーっ。何でよ。あたしは『掃除します』なんて一言も言っていないよ。だからお母さん一人で片付けてよ」

訳の分からない理屈をこねている。

そこは母だ。何かビシツと言ってくれるに違いない。俺は密かに期待した。が――次の瞬間、母の口から出てきた言葉に俺は、言葉を失った。

「そうね。工美はまだ降参してないもんね。私一人で片付けるわ」
えーーーーーっ!! マジッスカ。

ちよつと、母さんってば。溜め息つきながら片付けるんだったら、彼女を説得しようよ。

彼女もさ、『勝った!』みたいな満足げな笑み浮かべてるんだったら、手伝おうよ。

どういう力関係が出来上がってるんだろうか。

これから聞かなくてはならない事が、また一つ増えた。

第十四話 母さんと彼女2（後書き）

短い……。頑張ってこれかよ！って感じですが。

今年もorangeをどうぞよろしくお願いします。

m
——
m

第十五話 河田家の夕食

トントントン。

小気味良い音が、この部屋まで聞こえてくる。

「今日の夕飯は何なんだろうなあ」

誰にとも無しに俺は呟いた。

ここは、数分前の悲惨な状態から一転した俺の部屋。簡単に言ってしまうと、母さんはわずか数分という時間であの汚い部屋を片付けてしまった、という事だ。

そして母さんは今、彼女と一緒に台所に立っている。

恐るべし主婦パワー。俺は母さんという存在を少し見直した。

「ご飯出来たわよ」

下から母さんの声が聞こえる。

「うん。今行く」

返事をしながら時計を見ると、まもなく七時という頃だった。

俺は読みかけの本にしおりを挟むと、二人が待っているであろう居間へと降りていった。

「今日は工美ちゃんも手伝ってくれたのよ」

母さんが笑顔で言う。

「お待たせ」

そう言っただけ抱える彼女は、俺と一つ違いとは思えないほど大人びて見えた。

「あ、すぐ盛るからね」

母さんが皿を出し、彼女が鍋の中の物を盛る。

俺の居ない間に何があったのだろうか。二人の打ち解け具合に戸惑いを感じつつも、俺は盛られていく液体に、何気なく目をやった。

それを見た俺は、目を見開いた。何なんだこれは。

一見、カレーの様に見えるがそれにしては妙な物が入りすぎている。カレー色の液体に浮かぶ物体は、どうやら俺が今日買ってきた物らしい。もつとも、切つてある上に色まで付いているので断言は出来ないが。

「はい。母さんと工美ちゃんが作った、特製シチューよ」

目の前にドーンと置かれる皿。角度を変えて見てみるが、どう見てもシチューには見えない。

「母さん。どっからどう見たらシチューになるの？ カレーって言われたら、まあ納得出来ないことも無いけどさ」

俺は疑問を口にする。

「あのね、祐哉。シチューはシチューでも、ビーフシチューってもんがあるのよ」

母さんは溜め息をついた。

「でも、見た感じ牛肉入ってないよね。しかも、カレーの匂いするし」

「……」

沈黙。重い空気に堪えきれなくなったのか、彼女がわざとらしい明るい声で言った。

「さ、早く食べようよ。早くしないと冷めちゃう」

「うん、そうね。早く食べましょ」

おい。さっきの俺の突っ込みは無視かよ。

「祐哉もゴチャゴチャ言つてないで、食べなさい。ま、食べたくなின்なら別にいいけど」

…… 食べたい訳じゃないが、さっきからお腹がグルグル鳴っている。食べ物にありつける、絶好のチャンスだ。空腹を満たさない訳にはいかない。

「いただきます」

意を決し、カレー色の液体を口に運ぶ。そして一言。

「まずい」

一体何が入ってるんだよ。この液体には。^{シチュー}

さっきの一口の中にも、シチューには入るはずが無い、バナナだとか、きゅうりがあつたぞ。

「まずいのかあ。残念だなあ」

母さんが、自分の皿の中身を鍋に戻しながら言った。そういえば、その隣にも同じ事をしている彼女が居るな……。

って事は、俺って――

「毒味役かよっ！」

結局、この日の夕食は、ご飯に納豆をかけた、シンプルかつ安全な納豆ご飯でした……。

第十五話 河田家の夕食（後書き）

どうも、話が進まないですね。。。十五話目にしてやっと、工美ちゃんが出来てから二日目の夜です（遅っ

更新スピードを上げたいのですが、脊髄反射で書いてるもんで、最近どうも調子が悪くて……。要するに、ネタ切れなんです（苦笑

どうかorangeを応援してください。コメントだけでも良いので、よろしくお願いします。

十六話 勘違い（前書き）

ついに、読者様数が1300を超えました。読んでくれる皆様、本当に感謝しております。

それにも関わらず。更新、遅れてすみませんでした（↑何だか毎回言ってる気がするのですが……）。

十六話 勘違い

「ジリリリリ……」

目覚まし時計が鳴っている。うるさいから、早く止めなくちゃ。

俺は寝ぼけながら、時計を手につった。

六時半。大丈夫。あと十分なら寝れる。

俺は目覚まし時計を止めると、再び布団の中に潜り込んだ。

「……ちゃん」

誰だろう。

「……いちゃん」

誰かが俺を呼んでいる？

「お兄ちゃんってば！」

俺はぼんやりと目を開けた。

「今、何時だか分かってんの？」

目の前には、腰に手を当てた彼女の姿があった。

彼女の言葉に、時計を見ると、七時五十分。はっと俺は飛び起きた。俺の脳がフル回転を始める。

これから、いつものスピードで着替えをして、朝食を摂っていたら、学校には絶対に間に合わない。こうなったら、物凄い速さで頑張るしかない。

こう思った俺は、すぐさま行動を開始した。

彼女を部屋から追い出し、制服に着替える。着替え終わると、俺は派手な音をたてながら階段を降りた。

「あら、祐哉。おはよう。今日は早いね」

居間に着くと、朝食を摂っていた母さんが驚いたように言った。

「いつもだったら休みの日は、十時過ぎまで寝てるじゃない」

「休みの日、って言った、よね？」

俺は、壁に掛かっているカレンダーに目をやった。確かに今日の
日付の色は、休日を表す赤だ。

「もしかして、本気で間違えた？ 制服に着替えてるし、何だか慌
ててる風だし」

母さんが笑う。俺は、恥ずかしくなって俯いた。

「そんなんじゃないよ！」

そう吐き捨てる、俺はもう一度自分の部屋に戻った。

「はぁ……」

部屋でジャージに着替えながら、自然と溜め息が出た。

「俺、バカだなあ」

よく考えれば、カレンダーもこの部屋の目立つ所にあるのに。

「俺のバカ……」

俺は、ベッドに突っ伏した。

十六話 勘違い（後書き）

またまた短いです。。。やっと、工美ちゃんが来てから3日目の朝になりました（笑）

スローペースな私ですが、温かい目で、見守っていて下さいね。

第十七話 失踪？

「祐哉、起きてる？」

部屋の扉が遠慮がちに開く。

俺は、ベッドに乗せていた頭を起こした。どうやら少し寝ていたらしい。そういえば変な夢を見ていた気がする。

「今起きたけど、何？」

目を擦りながら扉の外に向かって答える。

「お母さん、工美ちゃんと一緒にお買い物行ってくるから、留守番頼むわね」

「うん、分かった」

俺はなるべく感情を表に出さないようにしながら、答えた。

「じゃ、よろしくね。うふふ、楽しみだわ」

母さんはご機嫌だ。何故、いきなり彼女と買い物に行こうと思ったのか知らないが、俺としては、二人に早く出発して欲しい。

「じゃあ、楽しんできてね」

「言われなくても楽しんでくるわよ。留守番、本当によろしくね」
そう念を押して、母さんは部屋を出て行った。

途端、俺の我慢していた感情が溢れ出す。

「よっしゃあ！」

一人、部屋で叫ぶ高校一年生。はたから見たら、ただの変人だろう。しかし、この時の俺は、一人きりの時間が嬉しくて嬉しくて、仕様が無かったのだ。

「よーし！ やりたい事やってやろうじゃないか」

俺は、大きすぎる独り言を言って、ゲーム機のスイッチを入れた。

「……平和だなあ」

俺はゲーム機を机の上に置くと、呟いた。時計を見ると、二人が出て行ってから、数十分が経とうとしていた。

「平和すぎるのも、何か怖いなあ」

別に平和である事が悪いと言っているのでは無い、というかむしろ良い事なのだが、何故だろう。悪い予感がする。しかも、皮肉な事に、その予感は当たる事が多いのだ。良い事の場合は一切当たらないのに、だ。

「プルルルル……」

唐突に電話が鳴る。俺は、深呼吸して電話のある一階へ降りていった。

「はい。河田ですが」

悪い予感が当たらない事を祈りながら、受話器を取った。

「祐哉！ 大変なの」

——残念ながら、予想的中。母さんの声から、慌てている事が窺える。

「え？ 何が？」

無意識のうちに、受話器を持つ手が震えていた。

「母さん。一体何があったの？」

「工美ちゃんがいなくなっちゃったのよ……」

母さんは、今にも泣きそうな声で、言った。

第十七話 失踪？（後書き）

あと少しで完結する予定です。もうしばらく、orangeにお付き合います。

第十八話 失踪？2（前書き）

読者様数が1600人を突破しました。

読んで下さっている皆様のご期待に副えるよう、頑張っていこうと思います。

第十八話 失踪？2

「工美が居なくなった、って言った？」

俺の声は、自覚出来る程震えていた。

「どうしよう、祐哉。お母さん、何すればいいの？」

母さんは、パニックになっている様で、いつもより早口になっていた。

「今どこ？」

俺の口が勝手に動いた。

「いつも行ってるデパートだけど。どうするつもり？」

母さんが怪訝そうに言う。

「今から行くから。入り口の所で待ってて」

「あ、ちよつと待つ……」

俺は、母さんが言い終わる前に、電話を切った。

あのデパートなら、なんとか歩いていける距離だ。急いで上着を羽織ると、ダッシュで母さんの待つデパートへと向かった。

「お待たせ……」

母さんは、デパートの入り口の所に居た。そこに俺が着いたのは、家を出てから五分も経たない時間。さすがに無理すぎたのか、息は絶え絶え、汗はだらだらだった。

「祐哉！ 本当に来てくれたのね」

母さんの顔が輝く。しかしそれは、一瞬の事で、すぐに不安げな表情に戻ってしまった。

「工美ちゃん、どうしちゃったのかしら。お母さんが『工美ちゃん、このお洋服どうかしら』って振り向いたら、もうそこには居なかったのよ。ほんの数秒前には、すぐ後ろに立ってたのに……」

「ちゃんと探したの？」

「探したわよ。数秒でそんなに遠くに行くとは考えられないから、

立つてる位置から肉眼で見える程度でだけど」

確かに数秒で移動できる距離は限られている。いくら足が速い人でも数秒でフロアを移動する事は不可能だろう。

「どうしようか……」

俺たちは、呆然と立ち尽くすばかりだった。

一体、どれだけの時間が経っただろう。ふいに母さんが呟いた。

「こんな所で立ってたって、何の意味も無いわ。さあ、帰りましょ」
「え、でも……」

「工美ちゃんも家に帰ってて、すれ違いになったのかもしれないし。ね、だから帰りましょう」

母さんは、そんな事は絶対にありえないだろう、という顔をしていたが、俺は黙って頷いた。母さんが俺に気を使って言ってくれているような気がしたからだった。

「それじゃ、帰りましょうか」

母さんが歩き出す。俺もそれに合わせて足を踏み出した。

家に着くまでの時間、二人は何も話をしなかった。いや、出来なかったと言った方が正しいのかもしれない。

何気なく、空を仰ぐ。

夕方の色と夜の色が交じり合って、何とも言えない雰囲気醸し出していた。

第十八話 失踪？2（後書き）

間があいてしまい、すみませんでした。

ストーリーというか、描写が上手に出来ませんでした……。なんとかまとめたのですが、表現がおかしいなどというご指摘、いつでもお待ちしております。

第十九話 置手紙

「鍵、掛けてなかったの？ 無用心なこと」

母さんは、力なく笑った。

俺は、急いでたから、と答えて玄関のドアを開けた。靴箱の上に、紙が一枚、置いてある。

「母さん。この紙……」

俺が指差して言うと、母さんはそれを取り上げて、読み始めた。

「今まで、大変お世話になりました。私は無事未来に帰る事が出来るようです。迷惑ばかりかけて、ごめんなさい。本当に、楽しい日々でした。3日間ありがとうございました」

俺は母さんの持つている紙を奪い取る。

「工美より——だって」

俺はその紙を母さんに押し付けると、家の中に入った。無言で部屋へと向かう。

「祐哉……」

母さんの声が、微かに聞こえた。

俺は、部屋に入るとベッドに直行した。勢いよく、顔面から布団にダイブする。

「がほっ」

とかいう訳の分からない奇声を発しながら、俺は布団にのめり込んだ。

良かった。あんな、はた迷惑な奴、ずっと家に居てくれたら困ると思ってたんだ。自分から帰ってくれるなんて、嬉しい限りじゃないか。

——そう思うのに、何故かすつきりしなかった。

俺は顔を布団から離し、ベッドに座りなおす。

「どうしていきなり帰っちゃうんだよ」

無意識のうちに呟いていた。

「どうして紙切れ一つだけ残して帰っちゃうんだよ……」

——何でだろう。俺はそんな事これっぽっちも思っていないのに。

「どうして、どうしてなんだよー！」

彼女が居なくなつて、何となく広い感じのする部屋に、俺の音が響いた。

「祐哉。ご飯出来たわよ。降りてらっしゃい」

母さんの声が聞こえる。いつの間にか流れていた涙をこしこしと擦ると、大きな声で返事をした。

「うん、今行くよ！」

俺はちよつとわざとらしくったかな、と一人で苦笑しながら、一階に降りて行った。

第十九話 置手紙（後書き）

更新がかなり遅れてしまい、申し訳ありませんでした……。

インフルエンザでダウンしたり、テストがあつたりと、色々大変だったんです（汗）

みなさん、体調管理はしっかりしておいた方がいいですよ（苦笑）

第二十話 戻ってきた平穩（前書き）

更新が大分遅れてしまつて申し訳ありませんでした……。

第二十話 戻ってきた平穩

「はあ……」

俺は、ベッドに寝転びながら、本日何度目かの溜め息をついた。何のせいかなんて、分からない。でも、ちよつとでも気を緩めると、勝手に溜め息が出てくるのだ。

「どうしちゃったんだ？ 今日の俺」

自分に話しかけるように言ってみたが、もちろん返事は無い。

——今日の俺はおかしい。変だ。一体どうしたっていうんだ。俺らしくない。

第一、彼女が消えたからといって、動揺する時点で、どうかしている。

「祐哉？」

突然ガチャリとドアが開いて、俺は飛び上がった。

「な、何？ 母さん」

まだ心臓がバクバクしている。

「お風呂、早く入っちゃいなさいよ？」

「うん、分かってる」

そう答えながら時計を見ると、まもなく十一時になろうとしていた。

……明日は学校だし、今日は早く寝なくちゃな。

俺は、着替えを持ち、風呂に入るために階段を下った。

『どうしたらいいんだろう』

『俺は、何がしたいんだろう』

そんな考えが頭の中に浮かんでは消え、消えては浮かんで、を繰り返していた。

「おはよう!」

母さんの明るい声が聞こえた。

カーテンを開けてみると、暖かい朝の光が差し込んでくる。

——昨日、何だかんだ言いながら、なんとか眠れたんだな。良かった。

「ああ」

そんな事を頭の片隅で考えつつも、俺は適当に挨拶を返した。

「何よ、その気乗りしない様な返事は」

母さんは、腰に手を当てて、言った。

「まあいいけどさ、早く支度しちやいなさいよ? 今日学校なんだから」

母さんのその言葉で時計を見ると、時計の針は七時を指していた。

「分かってるって。もう、いいから早く降りてっよ」

母さんを部屋から追い立て、着替えを始める。

…… やつと静かな朝を迎えられるんだなあ。

俺は大きなあくびを一つした。

第二十話 戻ってきた平穩（後書き）

次話あたりで完結する予定でいます。

最近、コメディイが入っていませんが、最終話はきちんと入れますので、楽しみにしてて下さいね——とは言えませんが（苦笑）、頑張りますので応援よろしくお願いします。

第二十一話 不法侵入者？（前書き）

最終話ではありません。あしからずご了承ください。

第二十一話 不法侵入者？

昼休み、机の上に頬杖をついて、窓の外を見てみると、小学校からの付き合^{しゅご}いである俊に声をかけられた。

「祐哉、どうしたんだよ。ぼーっとしちゃってさ」

「なんでもねえよ」

ぶっきらぼうにそう答えると、俊はニヤリと笑って、

「はーん。分かったぞ。これだろ」

と、小指を一本立てて見せた。

「んなわけねーだろ。バーカ」

「あ、そうなんだ、祐哉。いい事聞いちゃった」

お前、何でそんな楽しそうなんだよ。なんか語尾にハートマーク付いてるし。

「だから、違うつてば！」

「隠すなよ。照れるなよ。俺たち、親友だろ？」

「女の事じゃないつつうの！　っていうか俺、お前の事を親友だなんて思ったこと一度もないし」

「……」

お、やつと黙ってくれたか。良かった。

俺がほっとしていると、俊はいきなり嘔泣きを始めた。

「もう。祐哉君のイジワルう」

だからハートマーク付けんなって！　しかも何で女言葉なんだよ。

気色悪い。

「早く授業始まってくれないかな」

俺は俊を無視して、再び窓の外へと視線を戻した。

学校もやつと終わり、無事に家の前に辿り着いた俺は鍵を開けて、家の中に入る——はずだった。

「……」

——鍵は、開けたよな？ 俺は、まじまじと鍵を見つめた。
俺がそんな事を思ってしまうのも無理はない。何故なら、開けた
はずのドアが開かないのだから。

疑問を抱きつつも、俺は試しにもう一回、鍵を回してみた。本来
なら閉まるはずだ、だか。

「カチャッ」

何故だ。何故鍵が開いた？ もしかして、ドロボウか？

恐る恐る家の中に入る。

『出来るだけ、音をたてないように、慎重に』

思った事があると（逆に意識しすぎるのか）、ついその逆の事を
してしまう悪い癖がある俺は、やはり今回も失敗してしまった。

「うわっ！」

玄関にある、ちょっとした段差につまずいたのだ。……って俺は
年か！？

「誰？」

奥の方から、声が聞こえる。

「え……？ 誰か居るっ！」

俺は、頭の中が真っ白になった――。

第二十一話 不法侵入者？（後書き）

前回、「次回あたりで完結する」と言いましたが、文字数が多いと読みにくいかと思ひまして、次回完結に変更しました。
楽しみに待っていてくださった方。もしいらっしゃったら、本当にすみませんでした。

最終話 工美ちゃんツ！（前書き）

大変遅くなってしまい、申し訳ありませんでした。

反省が活かせない人ですみません。。。

最終話だという事で、気合入ってます（嘘です。まとまらなかっただけです）。いつもの二倍以上の文字数になってますので、読みづらいかもしれませんが、最終話という事で、お許し下さい。

最終話 工美ちゃんツ！

「パタパタパタ」

スリッパの音が近づいてくる。俺は、得体の知れない影におびえて、ただ震えている事しか出来なかった。

「パタパタパタ」

音がだんだん大きくなる。これは、確実に誰かが近づいてきている事を示していた。

「パタパタ、パタン」

足音が、止まった。急に目の前が暗くなる。

……来た。

影が目の前に立ちはだかった時、俺は下を向いて目を瞑っていた。——ああ神様。俺はここで死ぬのでしょうか。わずか十五年と数ヶ月で、俺の命は終わってしまうのでしょうか。どうか、かわいいそうなのこの若き少年をお助け下さい……。

「何やってんの？」

聞き覚えのある声に頭を上げると、そこには、腰に手を当てて俺を見下ろした彼女の姿があった。

「今お前が言った台詞、そっくりそのまま返す。お前、帰ったんじやなかったのか？」

俺は、腹が立った。

こんな奴相手に、あれ程までの恐怖心を抱いたという事に。

「えーっとお……。ちよつと手違いがあつて」

えへ、なんてはにかまないでくれ。頼むから。なんとなく調子が狂う。

それと。心配して損した。あの夜流した涙を返してくれ。

「ん？ 誰か来たのかい？」

突然、男の人の声がした。

……この声は、誰だ？ 彼女の声でも、俺の声でもない、となる
と、彼女以外にも家の中に誰かが居るという事だ。

俺の顔の筋肉は、知らないうちにひきつっていた。

「ああ。祐哉君か」

俺よりは少し背が高く、眼鏡をかけた、やさしそうな男の人が、
彼女の後ろから現れた。

「俺は、確かに祐哉ですけど。おじさん、誰ですか？」

俺がそう問うと、その男の人は、おっとこれは失敬、と言って話
を続けた。

「私は、工美の父だ。——というより、未来の君のお父さん、って
説明した方が早いかな？」

「『未来のお父さん』と言う事は、母さんの再婚相手……？」
俺が呟くと、彼は頷いた。

「ちよつと早いけど、よろしく」

そう言われ、右手を差し出される。俺は無言で、その手を握り返
した。

手と手が離れた、丁度その時に、母さんが帰ってきた。

「ただいま！」

そして、玄関先に居る彼を見て、目を丸くする。

「誰なの？ この人。もしかして——」

母さんは、何を思ったか、買い物袋を取り落とした。

彼女と彼女の父親から話を聞いた母さんは、

「じゃあ、この方は工美ちゃんのお父さんなの？ それはそれは、
失礼しました」

と言つて、彼に会釈をしている。

「それで、どうしてここに帰つて来たの？」

俺が質問すると、彼女は苦笑して、

「お父さんが、色々仕出かしちゃってさ。『頼れるところはここだけ

だ！』って思つて」

と答えた。その隣では、彼女のお父さんが頭を掻いている。

「ゴメンな。こんな頼りないお父さんで」

「未来には帰れないの？」

俺が聞くと、彼女は無表情で頷いた。

「どうするの？」

「どうしよう……」

「……」

一瞬、静寂が辺りを包む。

——静かだ。隣に居る人の息遣いが聞こえるまでに。

「じゃあさ、家に皆で住んじやおうよ」

静寂は、母さんの突拍子もない一言によつて破られた。

「はあ？ どうしてそうなるんだよ！」

これは俺。

「えつ。いいの！？」

これは彼女。

「そんな、申し訳ない事……」

これは彼女のお父さん。

……これが、同時に聞こえたんだから、静寂なんてあつたもんじやない。

「だって、未来の世界では、一緒に住んでるんでしょう？ それがちょっと早まるだけじゃない。ね？ 問題ないでしょ？」

何が『問題ないでしょ？』だ。問題大ありじゃないか。

「そうだねえ……」

「うーん。そうかもなあ」

ちよ、ちよつと、何で納得しちゃってるの？

「はい。じゃあ、全員一致で、決まりね」

あの。母さん？ 俺、賛成してないんだけど。

「あ、そうと決まったら、挨拶しなきゃね」

彼女は満面の笑みを浮かべて言う。

勝手に話が進んでるーっ！ 完全に俺は部外者だな。

「今日からまたお世話になります。よろしく願いしますね」

「もちろんよ。楽しくなりそうね」

「良かったな、工美」

勝手に三人で盛り上がっている。

——ああ、頭痛い。

この三人は、絶対どこかズレている。まともに突っ込みが出来るのは、俺だけだと言えそうだ。

「果たして俺は、この三人についていけるのだろうか」
「なんだか、とっても心配だ。」

「ねっ、祐哉」

「え？」

いきなり話を振られ、戸惑っていると、母さんが手を握ってきた。
「祐哉も協力してよね。今日はご飯、二人分も多く作んなきゃいけないんだから」

そう言う母さんの顔は、いつにも増して輝いて見えた。

「うん、分かった」

自然と笑みがこぼれた。

さっきの問題は、今考えなければいけないという訳でもないし、
後で、退屈で退屈でしょーがない時に考える事にしよう。

まあ、なんとかやっていけるだろう。この家族だったら。

母さんと一緒に台所に向かううちに、俺の頭の中でそんな考えが

出来上がった。

最終話 工美ちゃんッ！（後書き）

今まで読んで下さった皆様、こんな駄作に付き合っ
て下さいまして、有り難うございました。

ご感想、ご評価、いつでもお待ちしております。

o r a n g e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9783a/>

工美ちゃんがゆくっ！！

2010年10月8日15時33分発行